

当事者の頑張る姿に刺激・成長

支え合い それが励み

ひだまりを 求めて

養護施設を出た若者たち ①

料理の香りと湯気が部屋を満たす。しし鍋、卵焼き、サラダ、ピラフ。児童養護施設の退所者を支援する団体「ひだまり」（鳥取市）の長机が食卓に早変わり。10人ほどが缶ビール片手にほおぼる。仕事、恋愛、趣味と話題は尽きず、笑い声が絶えない。

施設を出た当事者のグループ「レインボーズ」が開く毎月恒例の食事会だ。児童養護施設は18歳になると退所するのが原則だが、レインボーズ代表の池田征人さん(41)は「施設を出ると戻る場所がない。社会にな

じめず、誰にも理解してもらえないと感じる子もいる」と言う。「当事者同士が頑張る姿を見せ合うと刺激になり、成長につながる。同じ境遇



レインボーズの食卓は笑いが絶えない。まるで大家族のようだ。鳥取市吉方温泉1丁目

先輩が後輩を「見守る」

だからこそ分かり合える」
レインボーズは元々、児童養護施設「鳥取こども学園」（鳥取市）の退所者の草野球チームだった。2008年に「ひだまり」が出来た後、互いを支え合う活動に力を入れ始めた。食事会のほか、まもなく18歳になる子どもたちに退所者が経験を語る機会も設けている。

池田さんは高校卒業と同時に施設を出た。水族館の飼育員を目指し、新聞配達をしながら専門学校に通ったが1年で辞めた。その後就いた調理の仕事は上下関係が厳しく、指示通りに仕事をこなしても怒られた。「どうしても施設で育ったせいにしてしまった」

居酒屋の店長を務める二つ年上の施設の先輩に相談した。「どこに行っても仕事があるわけじゃない。頑張れ」。誰の言葉より身にしてみた。同じ施設で寝起きし、同じご飯を食べた兄弟のような存在のありがたさに気付かされた。

池田さんはいま料理長になった。専門は和食で力二料理が得意だ。系列店の調理場三つを任せられ、3人の若手を指導する。「自分は普通の家庭で育った人とは違ふと考えると気

持ちが沈む。先輩が頑張る姿を見せるのが大事。一人ひとり見守ってほしい」

レインボーズのような当事者グループが集まる全国組織「こどもつと」が昨年結成された。鳥取、東京、千葉、栃木、名古屋の5団体が参加する。代表の清水真一さん(34)は「児童養護施設の子どものために声を上げる人はこれまで少なかった。当事者が行政に訴えるのが大事だ」と語る。

児童養護施設の出身者が里親制度で育った里子と連携する動きもある。奈良では昨年、里子だった18歳の女性が代表となり、里子と児童養護施設の退所者のグループ「明日天氣になあれ」が発足した。

里親制度も行政の援助が受けられるのは18歳まで。グループ作りを担ったNPO法人「おかえり」の理事長、柘田ふみさん(28)は「1人じゃないと思えるのが励みになる」。「明日天氣になあれ」の代表は柘田さんの家庭で里子として育った「妹」だ。「施設を出たり、里親の元から自立したりした人たちの経験が生かせる場になりたい」と柘田さんは語る。(西村圭史)